

フーテン人生

無邪気な

視点

#09

英国の高級住宅街の裏側

庭ではインド系老人が庭仕事をして
いる。友人宅の前を通る私道部分に
メルセデス・ベンツが進入してくる
と、にこやかに挨拶する車内の人々
は皆インド系であった。英国のこの
瀟洒な住宅街のほとんどがインド系
人種で占められている。

彼らの謙虚な様子を見て直感した
のは、1980年代に見かけたイン
ド人の清掃人や人夫の姿。例えば、
ロンドンの空港のトイレに行くと、
一生懸命に掃除しているのは大抵イ
ンド人で、彼らの物腰の柔らかさが
印象的だったことを思い出した。

ベッドルーム6つで居住面積が4
00㎡の家をロンドン郊外に買った
という英国人の友人に、招かれて行
つてみると、前庭も裏庭もトピオリ
(生け垣彫刻)を施した相当なもの
だった。玄関先から周囲の家を見回
すと、どこも似たような造りの新興
住宅地である。庭が広いので、隣家
との玄関の距離は50mほどであらう
か。日本でいえば麻布のお屋敷か芦
屋の六麓荘町くらいしか思い浮かば
ないが、英国ではこのような新興高
級住宅街が点在している。

その庭先で車から荷物を下ろして
いると、隣人から友人に声がかかっ
た。その人物はインド系英国人であ
った。さらにその隣の家の前ではイ
ンド系の子供たちが遊んでおり、表

彼らは英国連邦内インドから英国
に移民してきた人たちである。言葉
もイマイチで、インド本国ほどの仕
事に就けなかったにもかかわらず、
何やら生き生きしていた。

高級住宅街のインド人たちの現職
といえば、薬剤師、学校経営者、弁
護士などの高給取りで、この20〜30
年間に地元の人たちに取って替っ
てしまった職種である。元々頭がい
いとかそういうわけではなく、彼ら
は共通して勤勉である。移民世代は
次世代の子供たちのために肉休労働
をし、生活費と教育費を稼ぐ。その

うちの成功者たちがこの高級住宅に
親を引き連れ、三世代以上の大家族
として同居しているのである。

英国人は基本的に核家族であるの
に対して、インド人は英国に移住し
ても大家族を踏襲している。そし
て緊密な血縁・姻戚関係で結束す
るとともに、同国人同士のシンジケ
ートを作り、お互いを励まし合っ
てきた結果がこうしたニュー・ブリ
タニアといわれる彼らなのだ。

この種の例は、何もインド人だけ
ではない。中国からの華僑は然るこ
とながら、アメリカに渡った日本人
もリトル・トーキョーという日本人
街を作るほど、日本人コミュニティ
を大切にしたい。そして、その知性
とパワーを見せつけられた異人種が日
本人排斥運動などを起こした。

ここで言いたいのは、集まること
によって得られる力である。筆者の
知る範囲内ではあるが、海外に渡っ
て自国民同士の互助コミュニティを
形成した民族は、教育レベルも高
く、その子供たちは知的産業や斬新
なビジネスに就いている。華僑はそ
の好例だし、農業経営者の例でも、
次世代に教育機会を与え、ブラジル

発の日系農産企業として躍進してい
るところもある。

もちろん、移民して地元と同化す
るという選択もある。その場合は移
民の次世代あたりから混血化が進
み、故国のコミュニティとの関係が
ないまま、その関係も失われてしま
う傾向にある。これでは本人のアイ
デンティティーを歴史からたどるこ
とさえ困難であろう。やはり、未来
を考えると、自分の文化を我が子に
背負わせてあげることが親の務めだ
と思う。おそらく、コミュニティを
作り、家族をその中で守っていくと
はそういうことなのだろう。だから
こそ、どんな仕事でも誇りをもって
取り組めるのだなあ、とトピオリを
手入れする老夫婦の前で彼らの積ん
だ歴史を想った次第である。

マック木下

ゼネコン、商社、航空旅行業、世界
的弱電企業などの国際畑で育ち過ぎ
た50代。1980年代から主に英国
に住み、英人が本名をちゃんと発音
できなかったの、いつしかマック
に。ジャンルには無節操なライター
で、執筆歴は10年間ほど。専門は
日英関係史とロンドンの歴史散歩。
寄稿先は『英国特集』『R.S.V.P.』
『Quality Britain』『Taste of Britain』
『未来教室』『ぼんじゅーるレマン』
のほかミニコミや会員誌など。